JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	九谷焼の歴史を掘り起こす　－能美九谷歴史調査会－
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ，20
Issue Date	2008-03
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/4872
Rights	
Description	

Japan Advanced Institute of Science and Technology

4 今後の展望

九谷焼はご存知のとおり石川県を代表する伝統工芸であり、金沢から加賀までの地域で時代とともに産地と様式が移り変わってきたことが特色です。そのなかでも能美地方の九谷焼は「産業九谷」と呼ばれ、分業体制による大量生産を実現し、世界の市場で「ジャパン・クタニ」の名声を築きました。

能美九谷歴史調査会は能美九谷の歴史をまとめる活動を進めており、九谷焼産地の関係者で運営されています（下図参照）。調査会では今後も九谷焼産業に縁の深い大先輩や郷土史家からお話をうかがい、地域の歴史を掘り起こしていこうと考えています。いわゆるオーラル・ヒストリーの手法を使って調査を進めていきますが、それは地域に眠った記憶を呼びさまし、検証していくことでもあります。

北陸先端大では調査活動や資料作成、九谷茶碗まつりの企画展示で協力をしています。地域の一員として、この活動が地域資源を豊かにすることにつながり、地域の魅力が一層増していくことを期待しています。地域に対する人びとの関心が高まり、その歴史を理解し共有することが地域イノベーションの新たな胎動を生んでいく基盤になると考えているからです。

能美九谷歴史調査会の構成

※（　）内は担当

塚谷　典一	元 財団法人九谷焼振興協会 会長	（監修）
上出 兼太郎	元 石川県陶磁器商工業協同組合 理事長	（監修）
山岸　正美	財団法人大野からくり記念館 館長代行	（編集長）
吉田　正一	石川県陶磁器商工業協同組合 副理事長	（調査）
中村　　司	石川県陶磁器商工業協同組合 調査会委員長	（調査）
緒方　三郎	北陸先端科学技術大学院大学 特任准教授	（調査・資料作成協力）

21世紀 COEプログラム

「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」とは？

「21 世紀 COE プログラム」とは、日本に世界最高水準の研究教育拠点（center of excellence）を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材の育成を図るため、平成 14 年度から文部科学省が実施している事業。「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」は、本学で採択された最初の COE プログラムであり、平成 15 年度から始まって今年が 5 年目、すなわち最終年度にあたる。本プログラムでは先端科学技術の研究の場、さらに社会のあらゆる状況において、イノベーションを起こすための知識創造プロセスの研究、そして、それを担う人材としての「知のコーディネータ」「知のクリエータ」育成に取り組んでいる。文理融合を、マテリアルサイエンス研究科（理系）と知識科学研究科（広い意味での文系）の連携プロジェクトという形で実践している点が、本 COE の大きな特色である。

JAIST 社会イノベーション・シリーズ　No.20

発　行　2008 年 3 月

発行所　国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センター
〒923-1292　石川県能美市旭台 1-1　知識科学研究科棟Ⅱ7 階

■本誌に関するご意見、お問い合わせ
TEL：0761-51-1839　FAX：0761-51-1767　E-mail：coe-secr@jaist.ac.jp

本誌は、文部科学省 21 世紀 COE プログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」の助成を得て発行しております。

JAIST
JAPAN ADVANCED INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY 1990
北陸先端科学技術大学院大学

JAIST SOCIAL INNOVATION SERIES

社会イノベーション・シリーズ 20

九谷焼の歴史を掘り起こす

― 能美九谷歴史調査会 ―

平成 20 年に通算 100 回を数える九谷茶碗まつり。初めて開催されたのは今から遡ること 100 年前、つまり明治時代です。一世紀もの歴史があるにも関わらず、祭りそのものの由来は地元・能美市でも意外と知られていません。そこで、100 回開催を機に九谷焼の組合が中心となって九谷茶碗まつりの歴史や能美地方の九谷焼の歴史を調査し、まとめることになりました。九谷焼業界や郷土史研究で活躍されてきた大先輩に導かれ、地域の歴史や記憶を掘り起こす一大プロジェクト！ JAIST は応援していきます。

No.20

1 能美九谷のアイデンティティ

石川県陶磁器商工業協同組合では、九谷茶碗まつりの100回目の開催を機に、九谷茶碗まつりの歴史や能美地方の九谷焼（能美九谷）の歴史をとりまとめることにしました。そこで、能美九谷歴史調査会を組織し、能美地方の九谷焼の歴史や特色を議論しています。

調査会では、能美地方の九谷焼（能美九谷）とは何か、ということが議論になっています。その問いに答えることは能美九谷のアイデンティティを確認することでもあります。

能美九谷のアイデンティティとは何でしょうか？　まだ、議論の途中ですが、郷土が生んだ二人の名工、斎田道開と九谷庄三、そして、江戸末期から始まった生産プロセスの分業化による「産業九谷」の興隆と商人の存在に注目しています。能美地域は明治以降じつに多くの商人を輩出してきました。その代表的な存在が綿野吉二です。

九谷焼茶碗まつり（2003年）

2 能美九谷の偉人たち

能美九谷の3人の偉人、斎田道開、九谷庄三、綿野吉二とはいかなる人物だったのでしょうか。3人の足跡を『九谷焼300年』（寺井町九谷焼資料館発行）などから紹介しましょう。

斎田 道開（1794-1868）

斎田道開（さいだ どうかい）は本名を斎田伊三郎と言い、寛政8年に佐野村の豪農 桶屋伊三右工門の長男として生まれました。文化8年、当時16歳の伊三郎は若杉村の十村役 林八兵衛が招いた肥前の陶工 本多貞吉の若杉窯に行き、製陶の技術を習得しました。

文化13年、21歳のとき、山代町の豆腐屋市兵衛について南京写染付の技法を学び、再び若杉窯に来て赤絵勇次郎につき赤絵を学びます。その後、27歳で京都に赴き、清水の名工水越与三平に製陶着画の方法を学び、文政10年に伊万里に学んだ後、美濃尾張など諸国の陶業地を歴遊しました。

天保6年、40歳の頃帰郷して佐野窯を始め、二代目伊三郎、松屋菊三郎等数十名が学びました。安政5年、佐野与四兵衛山に佐野石、鍋谷村に陶土を発見し、中川源左衛門、深田源六、三川庄助等に素地窯を作らせました。当時、7本の登り窯が茶碗山に煙を出していたと伝えられています。九谷焼の上絵に荒窯と金窯の二度焼の方法を生み出しました。明治元年9月、73歳で死去しました。

九谷 庄三（1816-1884）

九谷庄三（くたに しょうざ）は文化13年12月に能美郡寺井村に茶屋庄三郎の長男として生まれ、生後間もなく叔父与三郎に養育されました。幼名を庄七といいます。

文政9年、10歳で加賀藩窯の若杉陶器所へ入所。赤絵勇次郎に師事すること6年、天保2年に粟生屋源右衛門窯で楽陶を学びます。天保3年、小野窯へ窯工として入所し、すぐに頭角を現します。天保9年、越前丸山窯で陶業を指導しながら研鑽を積みます。天保12年、故郷寺井に帰り、上絵窯を築きました。

嘉永4年、武腰シヅと結婚し、これより北国街道沿いの新居に移り、名前を庄七から庄三へ改名します。慶応元年には彩色金襴手（庄三風）が完成しました。明治11年、明治天皇が行幸し、金沢で庄三の大香炉を、寺井の鈴木清七方で庄三の大皿と武腰善平の花瓶を天覧されました。明治16年8月に満67歳で死去しました。

綿野 吉二（1859-1934）

九谷焼の大貿易商である綿野吉二（わたの きちじ）は、安政6年12月に寺井村に生まれました。明治7年、父とともに神戸に支店を開設し、外国商社と取引を始めました。

明治13年、21歳の時、父から独立して横浜に移り、その後、米国、ヨーロッパに九谷焼の販路を拡げました。23歳の若さで日本陶商同盟会の頭取となり、その後も香港、シンガポール、広東に商圏を拡張しました。

また、九谷焼以外でも活躍をしています。明治31年には京浜急行電鉄を創立し、同32年1月に竣工しました。大正元年には寺井駅の開設にも尽力しました。

大正12年に関東大震災に会い、困難に直面しましたが、再度立ち上がり、晩年は横浜貿易協会の会頭を務めました。多くの功績を残し、昭和9年1月に77歳で死去しました。

3 茶碗まつりと九谷まつりの起源

3人の偉人。かれらは九谷茶碗まつりの歴史にも大きな関わりをもっています。現在、能美市で5月の連休に開催されている九谷茶碗まつりは、元々、旧寺井町の佐野地区と寺井地区で、別々に慰霊祭として開催されていたものです。

佐野の「茶碗まつり」は明治41年（1908年）に始まりました。村民が陶祖 斎田道開（伊三郎）の遺徳を偲ぶため、狭野神社弁天山に祖霊社を建て祀り、記功碑を建てました。明治41年に祖霊社を同神社に改築し、陶祖神社として道開らの慰霊祭を行ったのが、佐野茶碗まつりの始まりです。

一方、寺井の「九谷まつり」は大正10年（1921年）に始まりました。当初は「庄三まつり」と称しており、毎年6月5日に、寺井区五間堂道の庄三記功碑前通りで開催していました。大正15年、綿野吉二の祖霊社をもとに九谷神社を創建し、以後、本多貞吉・九谷庄三などの名工の慰霊祭を毎年行ないました。昭和25年に会場を旧能美線・本寺井駅前通りに移し「九谷まつり」と改称して開催、昭和46年以降は石川県九谷会館周辺で開催しました。

昭和48年、九谷茶碗祭奉賛会が設立され、石川県陶磁器商工業協同組合の主催となり、「九谷茶碗まつり」に名称を統一し、5月3、4、5日の連休に佐野・寺井の2会場で開催しました。さらに、平成10年からは会場も統一し、和田山古墳公園周辺で開催しています。

現在の陶祖神社（能美市佐野）

現在の九谷神社（能美市寺井）

HISTORY OF KUTANI POTTERY IN NOMI